

WILES の BIG GALOIS REPRESENTATION

山上 敦士 (京都産業大学)

1. Introduction

本稿は、第 20 回整数論サマースクールでの発表内容をまとめたものであり、Wiles の論文 [18]

“On ordinary λ -adic representations associated to modular forms”

に従い、Wiles による Λ -adic ordinary newform \mathcal{F} に付随する ordinary な Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$ の構成について概説する。本稿は [20] の内容から必要と思われる箇所を抽出し、それらに加筆修正して作成されたものであり、定義や術語の解説などの詳細については [20] の該当箇所をご参照いただきたい。

以下、 \mathbb{Z}, \mathbb{Q} をそれぞれ、有理整数環、有理数体とし、 $\bar{\mathbb{Q}}$ を \mathbb{Q} の代数的閉包とする。素数 p に対し、 \mathbb{Z}_p と \mathbb{Q}_p をそれぞれ p -進整数環、 p -進数体とし、 \mathbb{Q}_p の代数的閉包を $\bar{\mathbb{Q}}_p$ とする。以下、体の埋め込み $\mathbb{Q} \hookrightarrow \bar{\mathbb{Q}}$ を固定しておく。

F を有限次総実代数体とし、 \mathcal{O}_F をその整数環とする。 \mathcal{O}_F の (0) とは異なる任意の ideal \mathfrak{a} に対して、剰余環 $\mathcal{O}_F/\mathfrak{a}$ の位数を $N\mathfrak{a}$ とかく。 $\bar{\mathbb{Q}}$ での F の代数的閉包を \bar{F} とかく。また、 \mathbb{A}_F を F 上の adèle 環とする。

一般に、 \mathcal{O}_F の ideal \mathfrak{c} 、整数 $k \geq 2$ 、 $\text{mod } \mathfrak{c}\mathfrak{S}_{\infty}$ の ray class character ψ に対し (ここで、 \mathfrak{S}_{∞} は F のすべての無限素点の積を表す)、parallel weight k 、level \mathfrak{c} 、character ψ の Hilbert cusp forms、そして、それらに作用する Hecke 作用素 $T(\mathfrak{a})$ 、 $S(\mathfrak{a})$ (\mathfrak{a} は \mathcal{O}_F の ideal) が定義される。Wiles の論文 [18] では、考える Hilbert cusp forms はすべて parallel weight なので、以下 parallel という言葉を省略して単に weight と呼ぶことにする。

\mathbf{f} を weight k 、level \mathfrak{c} 、character ψ の Hilbert cusp form とする。[16, Section 2] で、 \mathbf{f} に付随する Dirichlet 級数

$$D(s, \mathbf{f}) = \sum_{(0) \neq \mathfrak{a} \subset \mathcal{O}_F: \text{ideal}} c(\mathfrak{a}, \mathbf{f})(N\mathfrak{a})^{-s}$$

が定義されている。ここで、各 $c(\mathfrak{a}, \mathbf{f})$ は \mathbf{f} の Fourier 展開係数を用いて適切に定められた複素数である。とくに、 \mathbf{f} が Hilbert eigenform、つまり上述の Hecke 作用素すべてに対する同時固有形式であり、正規化

Date: September 10, 2012.

されている, つまり $c(\mathcal{O}_F, f) = 1$ である場合, \mathcal{O}_F の任意の ideal \mathfrak{a} に対し,

$$T(\mathfrak{a})f = c(\mathfrak{a}, f)f$$

が成り立ち, さらに \mathfrak{a} が \mathfrak{c} と互いに素なとき,

$$S(\mathfrak{a})f = \psi(\mathfrak{a})f$$

が成り立つ. このとき, Shimura により, f の Hecke 体

$$K_f := \mathbb{Q}(c(\mathfrak{a}, f) \mid \mathfrak{a} : \text{ideal})$$

は \mathbb{Q} 上の有限次拡大で総実代数体か CM 体になり, その中で, $c(\mathfrak{a}, f)$ は代数的整数であることが示されている (cf. [16, Proposition 1.3]). したがって, 上で固定した体の埋め込み $\mathbb{Q} \hookrightarrow \overline{\mathbb{Q}}_p$ により, $c(\mathfrak{a}, f)$ を p -進数とみなすこともできる.

以下, Hilbert cusp forms を p -進解析的に補間する “ Λ -adic forms” と呼ばれる対象を定義する. そのために改めて, 状況設定を行う.

\mathfrak{n} を \mathcal{O}_F の整 ideal とし,

$$\chi : \varprojlim_{r \geq 0} I_{np^r} \rightarrow \overline{\mathbb{Q}}_p^\times$$

を conductor \mathfrak{n} の strict ideal class character とする. ここで, I_{np^r} は F の strict ray class group mod np^r である.

$p \neq 2$ のとき $\mathfrak{p} := p$ とおき, $p = 2$ のとき $\mathfrak{p} := 4$ とおく. p -進単数群の分解

$$\mathbb{Z}_p^\times = \mu_\varphi(\mathfrak{p}) \times (1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p)$$

の各成分への射影をそれぞれ

$$\omega(a) \in \mu_\varphi(\mathfrak{p}), \quad \langle a \rangle \in 1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p \quad (a \in \mathbb{Z}_p^\times)$$

とおく. ここで, φ は Euler 関数を表し, $\mu_\varphi(\mathfrak{p})$ は 1 の $\varphi(\mathfrak{p})$ -乗根全体のなす部分群を表す. さらに, $u = 1 + \mathfrak{p}$ とおく. これは $1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p$ の相対的生成元, つまり, 等式

$$1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p = u^{\mathbb{Z}_p} := \{u^z \mid z \in \mathbb{Z}_p\}$$

が成立することが知られている (cf. [7, Section 7.1]). また,

$$\text{mod } \mathfrak{p} : \mathbb{Z}_p^\times \rightarrow (\mathbb{Z}/\mathfrak{p}\mathbb{Z})^\times$$

を $\mu_\varphi(\mathfrak{p})$ に制限したものが同型であり (cf. [10, 命題 2.17(2)]), その逆写像のことも

$$\omega : (\mathbb{Z}/\mathfrak{p}\mathbb{Z})^\times \xrightarrow{\sim} \mu_\varphi(\mathfrak{p}) \hookrightarrow \mathbb{Z}_p^\times$$

とかいて, 上述の射影

$$\omega : \mathbb{Z}_p^\times \rightarrow \mu_\varphi(\mathfrak{p})$$

とともに Teichmüller character という. このとき, ω は $(\mathbb{Z}/\mathfrak{p}\mathbb{Z})^\times$ の character たちを生成する.

$\mathcal{O}_\chi := \mathbb{Z}_p[\chi]$ とおき, \mathcal{O}_χ -係数の 1 変数形式的冪級数環を $\Lambda_\chi := \mathcal{O}_\chi[[T]]$ とおく. Λ_χ に値をもつ χ に付随した character

$$\chi : \varprojlim_{r \geq 0} I_{np^r} \rightarrow \Lambda_\chi^\times$$

を, np と互いに素な整 ideal \mathfrak{a} に対して,

$$\chi(\mathfrak{a}) := \chi(\mathfrak{a})(1+T)^{\mathfrak{a}}$$

とおくことで定義する. ここで, $a \in \mathbb{Z}_p$ は \mathfrak{a} に対して, $\langle N\mathfrak{a} \rangle = u^a$ という関係式を通してただ一通りに定まる p -進整数である.

Definition 1.1. (1) ([18, Section 1.2]) $2 \leq k \in \mathbb{Z}$ と 1 の p^r -乗根 $\zeta \in \mathbb{Q}_p$ ($r \geq 0$) の組 (k, ζ) 全体のなす集合を

$$\mathfrak{X} := \{(k, \zeta) \mid k \geq 2, \zeta^{p^r} = 1 \text{ for some } r \geq 0\}$$

とおき, 任意の $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ に対し, \mathcal{O}_χ -algebra 準同型

$$\nu_{k, \zeta} : \Lambda_\chi \rightarrow \mathcal{O}_\chi[\zeta]; \quad T \mapsto \zeta u^{k-2} - 1$$

が定まる.

\mathcal{O}_F の ideal 上の関数

$$\mathcal{F} : \{0 \neq \mathfrak{a} \subset \mathcal{O}_F : \text{ideal}\} \rightarrow \Lambda_\chi; \quad \mathfrak{a} \mapsto c(\mathfrak{a}, \mathcal{F})$$

が次の条件を満たすとき, \mathcal{F} を level np , character χ の Λ -adic form と呼ぶ:

(条件) 有限個を除くすべての $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ ($\zeta^{p^r} = 1$) に対して, ある level np^{r+1} , character $\chi_{k, \zeta} := N^{2-k} \cdot (\nu_{k, \zeta} \circ \chi)$ の Hilbert cusp form $\mathbf{f}_{k, \zeta}$ で, (0) とは異なる \mathcal{O}_F の任意の ideal \mathfrak{a} に対し

$$c(\mathfrak{a}, \mathbf{f}_{k, \zeta}) = \nu_{k, \zeta}(c(\mathfrak{a}, \mathcal{F}))$$

が成り立つものが存在する.

ここで現れる Hilbert cusp form $\mathbf{f}_{k, \zeta}$ を $\nu_{k, \zeta}(\mathcal{F})$ と表し, \mathcal{F} の $\nu_{k, \zeta}$ による特殊化 とよぶ. 上の条件の中で, 特殊化に用いられた有限個を除く (k, ζ) 全体のなす \mathfrak{X} の部分集合を $A_{\mathcal{F}}$ とおく.

level np , character χ の Λ -adic forms 全体のなす Λ_χ -加群を $\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi)$ とおく. 各 $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ における特殊化と可換な Hecke 作用素 $T(\mathfrak{a})$, $S(\mathfrak{a})$ (\mathfrak{a} は F の整 ideal) が, $\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi)$ 上に定まる. つまり, 各 $\mathcal{F} \in \mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi)$ に対し,

$$\nu_{k, \zeta}(T(\mathfrak{a})\mathcal{F}) = T(\mathfrak{a})\nu_{k, \zeta}(\mathcal{F}), \quad \nu_{k, \zeta}(S(\mathfrak{a})\mathcal{F}) = S(\mathfrak{a})\nu_{k, \zeta}(\mathcal{F})$$

が成り立つ.

(2) ([18, Section 1.2]) ある適切な位相のもと, Hilbert cusp forms のなす空間上に定まる Hida 作用素

$$e := \lim_{a \rightarrow \infty} T(p)^{a!}$$

が, $\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi)$ 上にも定まり, 各 $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ における特殊化と可換, つまり,

$$\nu_{k,\zeta}(e\mathcal{F}) = e\nu_{k,\zeta}(\mathcal{F}) \quad (\mathcal{F} \in \mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi))$$

を満たす ([18, Proposition 1.2.1]). このとき,

$$\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}^0(np, \chi) := e\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}(np, \chi)$$

とおき, Λ -adic ordinary cusp forms の空間という. e と各 Hecke 作用素は可換になるので, $\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}^0(np, \chi)$ 上にも Hecke 作用素が作用する.

ちなみに, [18, Section 1.4] において, 等式

$$\mathcal{S}_{\Lambda_\chi}^0(np, \chi) = \cup_{r \geq 0} \mathcal{S}_{\Lambda_\chi}^0(np^r, \chi)$$

が成立することが証明されているため, 本講演では始めから考える level を np に限定することにした.

(3) ([18, Section 1.5]) 正規化された Λ -adic eigenform $\mathcal{F} \in \mathcal{S}_{\Lambda_\chi}^0(np, \chi)$ が Λ -adic newform であるとは, 各 $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ に対し, $\nu_{k,\zeta}(\mathcal{F})$ が p -stabilized newform となることである. ここで, Hilbert eigenform が p -stabilized newform であるとは, p の外では new であり, \mathcal{O}_F の p を割る任意の素 ideal \mathfrak{p} に対して $T(\mathfrak{p})$ -固有値が p -進 unit であることを意味する ([18, Section 1.2]).

Remark 1.1. Hida の [7, Chapter 7] における Λ -adic forms の解説では, Wiles の流儀とは異なり, 特殊化に u^{k-2} ではなく u^k を用いていることに注意.

Example 1.1. $F = \mathbb{Q}$ のときには, Definition 1.1 (1) と同等の意味で, Λ -adic form を

$$\mathcal{F} = \sum_{a=1}^{\infty} c(a, \mathcal{F})q^a$$

と Fourier 展開の形で定義することができる. ここでは, [7, Proposition 7.1.1] に従う形で, cusp form ではなく Eisenstein series を p -進解析的に補間するものではあるが, 各 $c(a, \mathcal{F})$ が具体的に得られるという点で優れているので, Λ -adic form の具体例として Λ -adic Eisenstein series を紹介する.

$(\mathbb{Z}/p\mathbb{Z})^\times$ の trivial character $\mathbf{1}_p$ に対し, Kubota-Leopoldt の p -進 L -関数を用いて, ある $\Phi(T) \in \mathbb{Z}_p[[T]]$ で

$$c(0, \mathcal{E}) := \frac{\Phi(u^2(1+T) - 1)}{2(u^2(1+T) - 1)}$$

とおいたとき, 任意の $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ (ここで, ζ は 1 の原始 p^r 乗根とする) に対し, $\psi_{k,\zeta} : \mathbb{Z}_p^\times \rightarrow (\mathbb{Z}/p^r p\mathbb{Z})^\times \rightarrow \mathbb{Q}_p^\times$ を $\psi_{k,\zeta}(u) := \zeta$, $\psi_{k,\zeta}|_{\mu_\varphi(p)} = \mathbf{1}_p$

として定義したもとの、等式

$$\nu_{k,\zeta}(c(0, \mathcal{E})) = \frac{L(1-k, \psi_{k,\zeta}\omega^{-k})}{2}$$

が成立するものが構成される (cf. [7, Theorem 3.5.2]). ここで, $L(s, \psi_{k,\zeta}\omega^{-k})$ は $\psi_{k,\zeta}\omega^{-k}$ に付随する L -関数である.

一方で, 群の同型

$$\mathbb{Z}_p \xrightarrow{\sim} 1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p; \quad z \mapsto u^z$$

の逆写像を

$$s : 1 + \mathfrak{p}\mathbb{Z}_p \xrightarrow{\sim} \mathbb{Z}_p$$

とおき, 各 $a \geq 1$ に対し,

$$c(a, \mathcal{E}) := \sum_{0 < d|a, (d,p)=1} d^{-1}(u^2(1+T))^{s(d)} \in \mathbb{Z}_p[[T]]$$

とおけば, 任意の $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ に対し,

$$\nu_{k,\zeta}(c(a, \mathcal{E})) = \sum_{0 < d|a, (d,p)=1} (\psi_{k,\zeta}\omega^{-k})(d)d^{k-1}$$

となる.

以上の考察から,

$$\mathcal{E} := c(0, \mathcal{E}) + \sum_{a=1}^{\infty} c(a, \mathcal{E})q^a$$

とおけば, 任意の $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ (ここで, ζ は 1 の原始 p^r 乗根とする) に対し,

$$\nu_{k,\zeta}(\mathcal{E}) = \frac{L(1-k, \psi_{k,\zeta}\omega^{-k})}{2} + \sum_{a=1}^{\infty} \left(\sum_{0 < d|a, (d,p)=1} (\psi_{k,\zeta}\omega^{-k})(d)d^{k-1} \right) q^a$$

は weight k , level $p^r \mathfrak{p}$, character $\psi_{k,\zeta}\omega^{-k}$ の Eisenstein series となることがわかる. これらは eigenforms であり, 各 q^a の係数が $T(a)$ -固有値となる.

厳密に言えば, 定数項の補間を与える $c(0, \mathcal{E})$ が分母に T を含むので $\mathbb{Z}_p[[T]]$ の元ではないのだが, 各 $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ により Eisenstein series $\nu_{k,\zeta}(\mathcal{E})$ に特殊化することができるという意味で, 分母の T は許しつつ \mathcal{E} を Λ -adic form の具体例としてみなすことにしておきたい.

$\mathcal{F}_{\Lambda_{\mathfrak{X}}}$ を $\Lambda_{\mathfrak{X}}$ の商体とし, L を $F_{\Lambda_{\mathfrak{X}}}$ の任意の有限次拡大とする. \mathcal{O}_L を $\Lambda_{\mathfrak{X}}$ の L における整閉包とし, \mathcal{O}_L -係数の Λ -adic ordinary cusp forms の空間を

$$\mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(np, \chi) := \mathcal{S}_{\Lambda_{\mathfrak{X}}}^0(np, \chi) \otimes_{\Lambda_{\mathfrak{X}}} \mathcal{O}_L$$

とおく. 各 $(k, \zeta) \in \mathfrak{X}$ に対し, Λ_χ の素 ideal $\text{Ker}(\nu_{k, \zeta})$ を $P_{k, \zeta}$ とおく. また, \mathcal{O}_L -algebra 準同型

$$\tilde{\nu}_{k, \zeta} : \mathcal{O}_L \rightarrow \bar{\mathbb{Q}}_p$$

を $\tilde{\nu}_{k, \zeta}|_{\Lambda_\chi} = \nu_{k, \zeta}$ となるように取っておき, \mathcal{O}_L の素 ideal $\text{Ker}(\tilde{\nu}_{k, \zeta})$ を $\tilde{P}_{k, \zeta}$ とおく. このとき, $\tilde{\nu}_{k, \zeta}(\mathcal{O}_L)$ は \mathbb{Q}_p のある有限次拡大の整数環であり, $\mathcal{O}_L[\zeta]$ を含むことに注意.

ここで, 以上の設定のもと, 本講演の主定理を紹介する:

Theorem 1.1. $\mathcal{F} \in \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(np, \chi)$ を level np , character χ をもつ \mathcal{O}_L -係数の Λ -adic newform とする. このとき,

(1) (= [18, Theorem 4 in Introduction = Theorem 2.2.1]) \mathcal{F} に付随する Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$, すなわち, L -係数の既約な 2 次元 Galois 表現

$$\rho_{\mathcal{F}} : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(L)$$

で, 次の二つの条件

(i) np の外不分岐, つまり, \mathcal{O}_F の np を割らない任意の素 ideal \mathfrak{q} における惰性群 $I_{\mathfrak{q}}$ に制限したとき,

$$\rho_{\mathcal{F}}|_{I_{\mathfrak{q}}} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となる;

(ii) \mathcal{O}_F の np を割らない任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\text{Trace}(\rho_{\mathcal{F}}(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}),$$

$$\det(\rho_{\mathcal{F}}(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = \chi(\mathfrak{q})N\mathfrak{q}$$

を満たすものが存在する. ここで, $\text{Frob}_{\mathfrak{q}}$ は \mathfrak{q} における Frobenius 元を表す.

(2) (= [18, Theorem 2.2.2]) (1) の $\rho_{\mathcal{F}}$ について, \mathcal{O}_F の p を割る任意の素 ideal \mathfrak{p} において, ある二つの characters $\varepsilon_1, \varepsilon_2$ で, とくに ε_2 は不分岐で $\varepsilon_2(\text{Frob}_{\mathfrak{p}}) = c(\mathfrak{p}, \mathcal{F})$ を満たすものにより,

$$\rho_{\mathcal{F}}|_{D_{\mathfrak{p}}} \cong \begin{pmatrix} \varepsilon_1 & * \\ 0 & \varepsilon_2 \end{pmatrix}$$

とかける. この状況を \mathfrak{p} で ordinary であるという.

Remark 1.2. この定理は, $F = \mathbb{Q}$ の場合には Hida [5] により証明されている.

Remark 1.3. Wiles [18] の本来の目的は, Hilbert p -stabilized newform f に付随する ordinary な Galois 表現 ρ_f を構成することであった ([18, Theorem 1 (i) = Theorem 2.1.2, Theorem 2 = Theorem 2.1.4]). その目的

は、おおよそ次のように Λ -adic newform に付随する Galois 表現を用いて達せられている:

[18, Theorem 1.4.1] において、 f に対し、ある Λ -adic newform \mathcal{F} が存在し、

$$f = \tilde{\nu}_{k,1}(\mathcal{F})$$

が成り立つことが証明される。このとき、上記の定理により、 \mathcal{F} に付随する ordinary な Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$ が構成されており、その L 上の表現空間内に $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ -不変な \mathcal{O}_L -lattice をとることができて、それを $\tilde{\nu}_{k,1}$ で特殊化することで ρ_f が得られる。

以上のように、一つの Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$ から無数の Galois 表現 $\rho_{\tilde{\nu}_{k,\zeta}(\mathcal{F})}$ たちが生じることから、本講演のタイトルにあるように、 $\rho_{\mathcal{F}}$ のことを big Galois representation と呼ぶ。

2. 特別な場合

記号は前節と同じものを用いる。本節では、Theorem 1.1 をある特別な場合に証明する。この特別な場合での結果は、次節で一般の場合に Theorem 1.1 を証明する際に鍵となるものであり、本節は Theorem 1.1 の証明の第一段階となる。

そのために、以下、二つの Lemmas を準備する。一つ目は、無数の Galois 表現たちを擬表現の理論を用いて貼り合わせることで、一つの大きな Galois 表現を構成するものである:

Lemma 2.1 (= [18, Lemma 2.2.3]). $\{P_i\}_{i=1}^{\infty}$ を \mathcal{O}_L の高さ 1 の p の上にはない素 ideals の無限集合で、任意の $i \neq j$ に対し $P_i \cap \Lambda_{\chi} \neq P_j \cap \Lambda_{\chi}$ となるものとする。各 i に対し、

$$\rho_i : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(\mathcal{O}_L/P_i)$$

を連続な Galois 表現で、 F の素点の有限集合 Σ_i の外不分岐であるものとする。 \mathcal{O}_F の各素 ideal \mathfrak{q} に対し、ある $A_{\mathfrak{q}}, B_{\mathfrak{q}} \in \mathcal{O}_L$ が存在して、各 i に対し Σ_i に属さない任意の素 ideal \mathfrak{q} について、

$$\begin{aligned} \text{Trace}(\rho_i(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= A_{\mathfrak{q}} \pmod{P_i}, \\ \det(\rho_i(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= B_{\mathfrak{q}} \pmod{P_i} \end{aligned}$$

が成り立つと仮定する。さらに、複素共役 $c \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対し、各 i に対し $\det(\rho_i(c)) = -1$ となると仮定する。

このとき、 $\Sigma := \cup_i \Sigma_i$ の外不分岐な L -係数の Galois 表現

$$\rho : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(L)$$

で, Σ に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\text{Trace}(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = A_{\mathfrak{q}},$$

$$\det(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = B_{\mathfrak{q}}$$

を満たすものが存在する.

Proof. ここでは簡単のため, $p \neq 2$ としておく ($p = 2$ の場合も同様に証明できる).

各 i に対し, \mathcal{O}_L/P_i は \mathbb{Q}_p のある有限次拡大の整数環となる. その商体を $\text{Frac}(\mathcal{O}_L/P_i)$ とかくことにする. $c^2 = \text{id}$ かつ $\det(\rho_i(c)) = -1$ であるから, ρ_i の表現空間の $\text{Frac}(\mathcal{O}_L/P_i)$ 上の基底をうまく選ぶことで,

$$\rho_i(c) = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となるようにできる. この基底のもと, 各 $\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対し,

$$\rho_i(\sigma) = \begin{pmatrix} a_{\sigma} & b_{\sigma} \\ c_{\sigma} & d_{\sigma} \end{pmatrix}$$

とにおいて, 各 $\sigma, \tau \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対し,

$$x_{\sigma, \tau} := b_{\sigma} c_{\tau}$$

と定義する. 任意の $\sigma, \tau, \gamma, \beta \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ と Σ_i に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} における惰性群 $I_{\mathfrak{q}}$ の任意の元 g に対し, 以上の定義と ρ_i が \mathfrak{q} で不分岐であることから, 次の data (I) と関係式 (II)-(IV) が得られる:

- (I) continuous functions on $\text{Gal}(\bar{F}/F)$: $a_{\sigma}, d_{\sigma}, x_{\sigma, \tau}$,
- (II) $a_{\sigma\tau} = a_{\sigma}a_{\tau} + x_{\sigma, \tau}, \quad d_{\sigma\tau} = d_{\sigma}a_{\tau} + x_{\tau, \sigma},$
 $x_{\sigma\tau, \gamma\beta} = a_{\sigma}a_{\beta}x_{\tau, \gamma} + a_{\beta}d_{\tau}x_{\sigma, \gamma} + a_{\sigma}d_{\gamma}x_{\tau, \beta} + d_{\tau}d_{\gamma}x_{\sigma, \beta},$
- (III) $a_{\text{id}} = d_{\text{id}} = d_c = a_g = d_g = 1, \quad a_c = -1,$
 $x_{\sigma, \text{id}} = x_{\text{id}, \tau} = x_{\sigma, c} = x_{c, \tau} = x_{\sigma, g} = x_{g, \tau} = 0,$
- (IV) $x_{\sigma, \tau}x_{\gamma, \beta} = x_{\sigma, \beta}x_{\gamma, \tau}.$

このとき, data (I) にある $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ 上の連続関数の三つ組

$$\alpha := (a_{\sigma}, d_{\sigma}, x_{\sigma, \tau})$$

を $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ の $\text{Frac}(\mathcal{O}_L/P_i)$ への Σ_i の外不分岐な擬表現という. 一般に, $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ の表現 ρ から, 上述の構成を通して誘導される擬表現を $\tilde{\rho}$ とかくことにする. 擬表現 $\alpha = (a_{\sigma}, d_{\sigma}, x_{\sigma, \tau})$ に対して,

$$\text{Trace } \alpha(\sigma) := a_{\sigma} + d_{\sigma}, \quad \det \alpha(\sigma) := a_{\sigma}d_{\sigma} - x_{\sigma, \sigma} \quad (\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F))$$

とおく (cf. [19, Section 1.3] にも擬表現の解説があるのでご参照いただきたい).

さて、各 i に対し、上で ρ_i から構成した $\text{Frac}(\mathcal{O}_L/P_i)$ への擬表現 $\tilde{\rho}_i := (a_\sigma, d_\sigma, x_{\sigma,\tau})$ については、 $\rho_i(c) = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ であるため、

$$\begin{aligned} a_\sigma &= \frac{1}{2}(\text{Trace}(\rho_i(\sigma)) - \text{Trace}(\rho_i(\sigma c))), \\ d_\sigma &= \frac{1}{2}(\text{Trace}(\rho_i(\sigma)) + \text{Trace}(\rho_i(\sigma c))), \\ x_{\sigma,\tau} &= a_{\sigma\tau} - a_\sigma a_\tau \end{aligned}$$

が成り立つので、 Σ_i が有限集合であることと、 Σ_i に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} で

$$\text{Trace}(\rho_i(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = A_{\mathfrak{q}} \pmod{P_i} \in \mathcal{O}_L/P_i$$

であること、そして、2 が \mathcal{O}_L/P_i で可逆であることから、Chebotarev の稠密定理 (cf. [7, Theorem 1.3.1]) により、 $\tilde{\rho}_i$ は $\text{Frac}(\mathcal{O}_L/P_i)$ のみならず \mathcal{O}_L/P_i に値をもつ擬表現であることがわかる。

以下、求める Galois 表現 $\rho : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(L)$ を構成する手助けとして、まず、 ρ から誘導されるものに相当する \mathcal{O}_L への擬表現 α を構成する。そのために、各 $r \geq 1$ に対し、 $\mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_r$ への擬表現 α_r で、任意の $i = 1, \dots, r$ について、

$$\alpha_r \equiv \tilde{\rho}_i \pmod{P_i}$$

を満たすものがあるとき、同様の条件を満たす $\mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_{r+1}$ への擬表現 α_{r+1} を構成する: $\Sigma_1 \cup \cdots \cup \Sigma_r \cup \Sigma_{r+1}$ に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し、

$$\text{Trace } \alpha_r(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) \equiv A_{\mathfrak{q}} \pmod{P_1 \cap \cdots \cap P_r}$$

であり、一方、

$$\text{Trace } \tilde{\rho}_{r+1}(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) \equiv A_{\mathfrak{q}} \pmod{P_{r+1}}$$

であるので、

$$\text{Trace } \alpha_r(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) \equiv \text{Trace } \tilde{\rho}_{r+1}(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) \pmod{(P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}}$$

を得る。よって、Chebotarev の稠密定理により、 $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ 上で

$$\text{Trace } \alpha_r \equiv \text{Trace } \tilde{\rho}_{r+1} \pmod{(P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}}$$

となる。したがって、 $\mathcal{O}_L/(P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}$ への擬表現として

$$\alpha_r \equiv \tilde{\rho}_{r+1} \pmod{(P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}}$$

が得られて、剰余環のなす完全列

$$\begin{aligned} 0 \rightarrow \mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_r \cap P_{r+1} &\xrightarrow{(1)} (\mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_r) \oplus (\mathcal{O}_L/P_{r+1}) \\ &\xrightarrow{(2)} \mathcal{O}_L/((P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}) \rightarrow 0 \end{aligned}$$

により, $\mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_{r+1}$ への擬表現 α_{r+1} で

$$\alpha_{r+1} \equiv \alpha_r \pmod{P_1 \cap \cdots \cap P_r}, \quad \alpha_{r+1} \equiv \tilde{\rho}_{r+1} \pmod{P_{r+1}}$$

を満たすものが定まる. ここで, 上の完全列を定める準同型 (1), (2) はそれぞれ

$$\begin{aligned} (1) \quad &x \pmod{P_1 \cap \cdots \cap P_r \cap P_{r+1}} \\ &\mapsto (x \pmod{P_1 \cap \cdots \cap P_r}, x \pmod{P_{r+1}}), \\ (2) \quad &(x \pmod{P_1 \cap \cdots \cap P_r}, y \pmod{P_{r+1}}) \\ &\mapsto (x - y) \pmod{(P_1 \cap \cdots \cap P_r) + P_{r+1}} \end{aligned}$$

で与えられるものである. 以上の操作を繰り返すことで, 擬表現の無限列 $\{\alpha_r\}_r$ が入手できて, 射影極限 \varprojlim_r をとれば, Weierstrass preparation theorem (cf. [7, Lemma 7.3.1]) により

$$\bigcap_{i=1}^{\infty} P_i = (0)$$

であるから,

$$\mathcal{O}_L = \varprojlim_r \mathcal{O}_L/P_1 \cap \cdots \cap P_r$$

への擬表現 $\alpha = (a_\sigma, d_\sigma, x_{\sigma,\tau})$ で, Σ に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\text{Trace } \alpha(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) = A_{\mathfrak{q}}, \quad \det \alpha(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) = B_{\mathfrak{q}}$$

を満たすものが定まる.

すべての $\sigma, \tau \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対して $x_{\sigma,\tau} = 0$ ならば,

$$\rho(\sigma) := \begin{pmatrix} a_\sigma & 0 \\ 0 & d_\sigma \end{pmatrix} \quad (\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F))$$

と定義し, ある $\sigma_0, \tau_0 \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ で $x_{\sigma_0,\tau_0} \neq 0$ となるときは,

$$b_\sigma := \frac{x_{\sigma,\tau_0}}{x_{\sigma_0,\tau_0}}, \quad c_\sigma := x_{\sigma_0,\sigma} \quad (\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F))$$

とにおいて

$$\rho(\sigma) := \begin{pmatrix} a_\sigma & b_\sigma \\ c_\sigma & d_\sigma \end{pmatrix} \quad (\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F))$$

と定義すれば, ρ は $\tilde{\rho} = \alpha$ となる $GL_2(L)$ への Galois 表現であり, Σ に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} における惰性群 $I_{\mathfrak{q}}$ の任意の元 σ に対し, 各 i で

$$\rho(\sigma) \equiv \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \pmod{P_i}$$

を満たすので, 等式

$$\rho(\sigma) = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

が成立し, ρ は \mathfrak{q} で不分岐となる. さらに

$$\begin{aligned} \text{Trace}(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= A_{\mathfrak{q}}, \\ \det(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= B_{\mathfrak{q}} \end{aligned}$$

を満たすので, ρ は Lemma 2.1 の条件を満たす. \square

次に, 二つ目の Lemma についてであるが, Wiles が論文 [18] を発表する頃までには, weight が 2 以上の Hilbert newform f について, Shimura [14], Deligne [2], Rogawski-Tunnell [13], Ohta [11] の結果により, 次の二つのうちいずれかの条件が満たされるとき f に付随する既約な Galois 表現 ρ_f が構成されていた (cf. これらの結果に関する解説は [18, Introduction] を参照のこと. また, Hilbert newforms に付随する Galois 表現の構成に関する近年までの歴史的な流れについては [9, Section 2.3.8] に解説されている):

条件 (I): $[F : \mathbb{Q}]$ は奇数である;

条件 (II): f に付随する $GL_2(\mathbb{A}_F)$ の保型表現 π_f が, ある有限素点で special 表現か supercuspidal 表現をもつ.

そこで, ある特別な場合で, Hilbert newforms に付随する Galois 表現が ordinary であることを主張するのが次の二つ目の Lemma である:

Lemma 2.2 (= [18, Lemma 2.1.5] = [17, Theorem 2.2]). f を weight 2, character ψ_f の Hilbert newform とし, p を割る \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{p} に対し, f の $T(\mathfrak{p})$ -固有値 $c(\mathfrak{p}, f)$ が p -進 unit であるとする. さらに, f について, 上述の条件 (I) と (II) のいずれかが成立すると仮定する. 2 次多項式

$$x^2 - c(\mathfrak{p}, f)x + \psi_f(\mathfrak{p})N\mathfrak{p}$$

の二つの根のうち, p -進 unit である方を $\alpha_{\mathfrak{p}}$ とおく ($\alpha_{\mathfrak{p}}$ は f に付随する p -stabilized newform f^* の $T(\mathfrak{p})$ -固有値であることに注意).

このとき, f に付随する p -進 Galois 表現 ρ_f を \mathfrak{p} における分解群 $D_{\mathfrak{p}}$ に制限すると, ある二つの characters $\varepsilon_1, \varepsilon_2$ で, とくに ε_2 は不分岐で

$\varepsilon_2(\text{Frob}_p) = \alpha_p$ を満たすものが存在し,

$$\rho_{\mathbf{f}}|_{D_p} \cong \begin{pmatrix} \varepsilon_1 & * \\ 0 & \varepsilon_2 \end{pmatrix}$$

とかける. つまり, $\rho_{\mathbf{f}}$ は p で ordinary である.

Proof. 簡単のため, ここでは (I) の場合, つまり $[F : \mathbb{Q}]$ が奇数である場合を考える ((II) の場合でも同様に証明できることが, [18, Lemma 2.1.5] の略証に解説されている). 以下, [17, Theorem 2.2] の証明と [18, Lemma 2.1.5] の略証における解説に従って, (I) の場合の証明を概説したい (詳細はそれぞれの原論文の該当箇所をご参照いただきたい).

Shimura [15], Hida [4], Carayol [1] の結果から, それに付随する p -進 Galois 表現が $\rho_{\mathbf{f}}$ の役割を果たすような, F 上定義された Abel 多様体 $A_{\mathbf{f}}$ が存在することが知られている (cf. [17, Theorem 2.1]). このとき, [17, Lemma in Section 2.1] により, $A_{\mathbf{f}}$ は p で, good reduction かもしくは, bad reduction の場合には purely multiplicative reduction かあるいは potentially good reduction をもつことが示されている.

(i) purely multiplicative reduction をもつ場合: Raynaud [12, Théorème 1] により, Abel 多様体への Tate curve の理論の一般化がなされているので, $A_{\mathbf{f}}$ に付随する p -進 Galois 表現 $\rho_{\mathbf{f}}|_{D_p}$ が分岐する 1 次元部分表現をもち, それによる商表現が自明な表現となり, $\rho_{\mathbf{f}}$ が p で ordinary であることがわかる.

(ii) potentially good reduction をもつ場合: $A_{\mathbf{f}}$ が good reduction をもつような F_p の有限次拡大 K をうまく選び, \mathcal{O}_K 上と \mathcal{O}_{F_p} 上のそれぞれで定義される $A_{\mathbf{f}}$ の Néron models の special fibers への reduction maps を用いた議論と Carayol [1] の結果を合わせて, $A_{\mathbf{f}}$ が p で good reduction をもつ場合へと帰着させる (この議論が [17, Theorem 2.2] の証明で要となる部分である).

(iii) good reduction をもつ場合: $A_{\mathbf{f}}$ が good reduction をもつ p 以外の素数 ℓ で, $A_{\mathbf{f}}$ に付随する ℓ -進 Galois 表現における Frob_p の特性多項式が $x^2 - c(p, \mathbf{f})x + \psi_{\mathbf{f}}(p)Np$ であることが示され (cf. $F = \mathbb{Q}$ の場合におけるこの特性多項式の計算については, たとえば [8, Section 4.2] を参照のこと), [3, Corollary in Section V.2] により, これは $A_{\mathbf{f}}$ の p -divisible group $A_{\mathbf{f},p}$ に付随する p -進 Galois 表現における Frob_p の特性多項式と一致することがわかる.

さらに, 特性多項式 $x^2 - c(p, \mathbf{f})x + \psi_{\mathbf{f}}(p)Np$ が p -進付値が 0 である根 α_p と p -進付値が正である根の相異なる二つの根をもつことに注意して, [3, Section IV.8] により, p -divisible group $A_{\mathbf{f},p}$ の connected-étale 分解

$$0 \rightarrow A_{\mathbf{f},p}^0 \rightarrow A_{\mathbf{f},p} \rightarrow A_{\mathbf{f},p}^{\text{et}} \rightarrow 0$$

に対応して、付随する p -進 Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_p}$ は、 Frob_p が p -進付値 0 の根 α_p によるスカラー倍で作用する不分岐な 1 次元の商表現をもつことが示されている。□

以上の二つの Lemmas を用いて、特別な場合に Theorem 1.1 を証明しておく。これは、次節で一般の場合に Theorem 1.1 を証明する際に、 np と互いに素な \mathcal{O}_F の無限個の素 ideals l を用いて、“ l に関して new” な Λ -adic eigenforms に付随する Galois 表現に議論を帰着させるうえで、重要な役割を果たすものである：

Proposition 2.3 (= [18, Lemma 2.2.4]). $\mathcal{F} \in \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(np, \chi)$ を Λ -adic newform とする。上述の条件 (I) と (II) のうちいずれか一方が、任意の $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ における特殊化 $\tilde{\nu}_{k, \zeta}(\mathcal{F})$ に対して満たされていると仮定する。このとき、 \mathcal{F} に対して Theorem 1.1 の主張が成立する。

Proof. (1) $\rho_{\mathcal{F}}$ の存在について： 任意の $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ における \mathcal{F} の特殊化 $\tilde{\nu}_{k, \zeta}(\mathcal{F})$ が条件 (I) もしくは (II) を満たすので、Lemma 2.2 の直前で言及したように、 $\tilde{\nu}_{k, \zeta}(\mathcal{F})$ に付随する Galois 表現

$$\rho_{k, \zeta} : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(\mathcal{O}_L/\tilde{P}_{k, \zeta})$$

が存在する。とくに、 $\rho_{k, \zeta}$ は np の外不分岐であり、複素共役 $c \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対し $\det(\rho_{\mathcal{F}}(c)) = -1$ となることに注意。 $\{\tilde{P}_{k, \zeta}\}_{(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}}$ は Λ_{χ} に制限したときに高さ 1 で p の上にない相異なる無限個の \mathcal{O}_L の素 ideals の集合なので、Lemma 2.1 を適用することができ、求める \mathcal{F} に付随する Galois 表現

$$\rho_{\mathcal{F}} : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(L)$$

が得られる。このとき、しかるべき (k, ζ) での特殊化 $\rho_{k, \zeta}$ が既約なので、 $\rho_{\mathcal{F}}$ も既約であることがわかる。

(2) $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_p}$ の振る舞いについて： p を割る \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{p} を一つ取り、

$$\varepsilon : D_{\mathfrak{p}} \rightarrow L^{\times}$$

を不分岐な character で、 $\varepsilon(\text{Frob}_{\mathfrak{p}}) = c(\mathfrak{p}, \mathcal{F})$ となるものとする。ここで、 $D_{\mathfrak{p}}$ の二つの 2 次元表現

$$\rho_{\mathcal{F}}, (\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}} \oplus \varepsilon) : D_{\mathfrak{p}} \rightarrow \text{GL}_2(L)$$

を考えると、 $D_{\mathfrak{p}}$ 上で

$$\det \rho_{\mathcal{F}} = \varepsilon^{-1}(\det \rho_{\mathcal{F}}) \cdot \varepsilon = \det(\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}} \oplus \varepsilon)$$

である. また, $k = 2$ としたうえで, 無限個の $(2, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ に対し, Lemma 2.2 により $\rho_{\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{F})}$ が \mathfrak{p} で ordinary であるので,

$$\begin{aligned} \text{Trace } \rho_{\mathcal{F}}(\text{mod } \tilde{P}_{2,\zeta}) &= \text{Trace}(\rho_{\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{F})}) \\ &= (\varepsilon(\text{mod } \tilde{P}_{2,\zeta}))^{-1}(\det \rho_{\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{F})}) + \varepsilon(\text{mod } \tilde{P}_{2,\zeta}) \\ &= \text{Trace}(\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}} \oplus \varepsilon)(\text{mod } \tilde{P}_{2,\zeta}) \end{aligned}$$

となり, Weierstrass preparation theorem により, $D_{\mathfrak{p}}$ 上

$$\text{Trace}(\rho_{\mathcal{F}}) = \text{Trace}(\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}} \oplus \varepsilon)$$

を得る. したがって, $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_{\mathfrak{p}}}$ の semisimplification は $\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}} \oplus \varepsilon$ と同値であり, とくに, $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_{\mathfrak{p}}}$ は $\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}}$ か ε で作用する 1 次元の部分表現をもつ. ここで, $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_{\mathfrak{p}}}$ が $\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}}$ で作用する 1 次元の部分表現をもつことが示されれば, 一方の ε は Theorem 1.1 (2) の主張にある ε_2 と同じ性質をもつので, $\varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}}$ を ε_1 と見立てることで, \mathcal{F} に対して Theorem 1.1 (2) が証明されたことになる.

以下, $\varepsilon_1 := \varepsilon^{-1} \det \rho_{\mathcal{F}}$, $\varepsilon_2 := \varepsilon$ とおく. もし, $\varepsilon_1 = \varepsilon_2$ ならば何も示すことはない. したがって, $\varepsilon_1 \neq \varepsilon_2$ と仮定して, ε_1 で作用する 1 次元の部分表現が存在することを示せばよい.

(1) で擬表現を用いて Lemma 2.1 の証明のように $\rho_{\mathcal{F}}$ を構成した際, 各 $\sigma \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対し $\rho_{\mathcal{F}}(\sigma)$ の (1, 2)-成分 b_{σ} の分母に用いられた $\xi := x_{\sigma_0, \tau_0} \in \mathcal{O}_L$ ($\xi \neq 0$) に着目すれば, $\rho_{\mathcal{F}}$ は $\text{GL}_2(\mathcal{O}_L[\xi^{-1}])$ に値をとることがわかる.

Weierstrass preparation theorem により, $\xi \notin \tilde{P}_{2,\zeta}$ となる $(2, \zeta) \in A_{\mathcal{F}}$ は無限個存在し, $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_{\mathfrak{p}}}$ の表現空間

$$V := \mathcal{O}_L[\xi^{-1}] \oplus \mathcal{O}_L[\xi^{-1}]$$

を, それらの $(2, \zeta)$ で特殊化した $\rho_{\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{F})}$ の表現空間を

$$V_{2,\zeta} := (\mathcal{O}_L/\tilde{P}_{2,\zeta})[\xi_{2,\zeta}^{-1}] \oplus (\mathcal{O}_L/\tilde{P}_{2,\zeta})[\xi_{2,\zeta}^{-1}]$$

とおく. ここで, $\xi_{2,\zeta}$ は, $\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\xi) \in \tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{O}_L)$ の同型 $\tilde{\nu}_{2,\zeta}(\mathcal{O}_L) \cong \mathcal{O}_L/\tilde{P}_{2,\zeta}$ における像を表す. Lemma 2.2 により, 各 $(2, \zeta)$ において, $V_{2,\zeta}$ は $D_{\mathfrak{p}}$ が $\tilde{\nu}_{2,\zeta} \circ \varepsilon_1$ で作用する 1 次元部分空間 $W_{2,\zeta}$ をもつ.

Weierstrass preparation theorem により, 特殊化の直積

$$\tilde{\nu} := \prod_{(2,\zeta)} \tilde{\nu}_{2,\zeta} : V \rightarrow \prod_{(2,\zeta)} V_{2,\zeta}$$

は単射であり,

$$W := \tilde{\nu}^{-1}\left(\prod_{(2,\zeta)} W_{2,\zeta}\right)$$

は D_p が $\prod_{(2,\zeta)} \tilde{\nu}_{2,\zeta} \circ \varepsilon_1$ で作用する V の部分空間で,

$$\tilde{\nu}|_W : W \rightarrow \prod_{(2,\zeta)} W_{2,\zeta}$$

も単射となる.

もし $W = V$ ならば, Weierstrass preparation theorem により, V 全体として D_p -作用が $\begin{pmatrix} \varepsilon_1 & 0 \\ 0 & \varepsilon_1 \end{pmatrix}$ で与えられてしまい, $\varepsilon_1 \neq \varepsilon_2$ と仮定していることに反する. 同様に, $W = \{0\}$ であるならば, 商空間 $V/W = V$ 上への D_p -作用が $\begin{pmatrix} \varepsilon_2 & 0 \\ 0 & \varepsilon_2 \end{pmatrix}$ で与えられてしまい, やはり $\varepsilon_1 \neq \varepsilon_2$ と仮定していることに矛盾する. よって, W は D_p が ε_1 として作用する V の非自明な部分表現であることがわかり, $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_p}$ は ε_1 を 1 次元部分表現としてもつことが示された. \square

3. Theorem 1.1 の証明

本節では以上の準備のもと, Λ -adic newform \mathcal{F} に付随する Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$ の存在と, p を割る素 ideal \mathfrak{p} で $\rho_{\mathcal{F}}|_{D_p}$ が ordinary であることを主張する Theorem 1.1 の証明を概説する.

$\mathcal{F} \in S_{\mathcal{O}_L}^0(\bar{\mathfrak{n}}, \chi)$ を Theorem 1.1 の主張にある Λ -adic newform とする. F_{Λ_χ} 上 \mathcal{F} の Hecke 固有値全体で生成される有限次拡大を $M_{\mathcal{F}}$ とおき, \mathcal{F} の Hecke 体と呼ぶ. $M_{\mathcal{F}}$ 中の Λ_χ の整閉包を $\Lambda_{\mathcal{F}}$ とおく:

$$\begin{aligned} \mathcal{O}_L &\subset L \\ \text{int.cl.} \cup &\quad \cup \\ \Lambda_{\mathcal{F}} &\subset M_{\mathcal{F}} \\ \text{int.cl.} \cup &\quad \cup \\ \Lambda_\chi &\subset F_{\Lambda_\chi}. \end{aligned}$$

\mathcal{F} に付随する Galois 表現を構成する手助けとして, 議論する状況をすでに Galois 表現の存在が知られている場合へと移し替えるために, np と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal l をとり, 次で定義される “ l に関して new” な Λ -adic eigenforms に着目する. そのために, \bar{F}_{Λ_χ} を F_χ の代数的閉包とし, L を $S_{\bar{F}_{\Lambda_\chi}}^0(np, \chi) := S_{\Lambda_\chi}^0(np, \chi) \otimes_{\Lambda_\chi} \bar{F}_{\Lambda_\chi}$ に属する任意の Λ -adic eigenforms の Hecke 固有値をすべて含むように大きくしておく (ここで, [18, Theorem 1.2.2] により, $S_{\bar{F}_{\Lambda_\chi}}^0(np, \chi)$ は有限次であることに注意).

Definition 3.1 ([18, Section 1.6]). Λ -adic cusp forms からなる有限集合 $\{\mathcal{F}_i(\mathfrak{a}_{ij}z) \mid \mathcal{F}_i \text{ は } l \text{ で割り切れる level } m_i p \ ((m_i, p) = 1), \text{ character } \chi \text{ の } \mathcal{O}_L\text{-係数の } \Lambda\text{-adic newform で, } \mathfrak{a}_{ij} \text{ は } \mathfrak{a}_{ij}m|nl \text{ を満たす } l \text{ と互いに}$

素な \mathcal{O}_F の ideal $\mathfrak{a}_{i,j}$ で, L 上生成された空間を $S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}$ とおき, l に関して new な Λ -adic cusp forms の空間という. ここで, $\mathcal{F}_i(\mathfrak{a}_{ij}z)$ は, 各 $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}_i}$ において, \mathcal{F}_i の特殊化 $f_{k,\zeta}$ と 整 ideal \mathfrak{a}_{ij} に対して定まる Hilbert cusp forms $f_{k,\zeta}(\mathfrak{a}_{ij}z)$ をその特殊化にもつ Λ -adic cusp form を表す. 無限個の各 $(k, \zeta) \in \cap_i A_{\mathcal{F}_i}$ において, $\{f_{k,\zeta}(\mathfrak{a}_{ij}z)\}_{ij}$ たちが 1 次独立であることから, $S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}$ の生成系は 1 次独立となることに注意.

$S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}$ の基底に現れる各 \mathcal{F}_i について, 任意の $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}_i}$ における特殊化 $\tilde{v}_{k,\zeta}(\mathcal{F}_i)$ は, character の conductor が l と互いに素で, level が l で 1 回だけ割り切れる p -stabilized newform であるので, $\tilde{v}_{k,\zeta}(\mathcal{F}_i)$ に付随する保型表現は l で special 表現をもつ (cf. [6, Lemma 12.2]). よって, \mathcal{F}_i に対して Proposition 2.3 を適用することができて, \mathcal{F}_i に付随し p を割る \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{p} で ordinary な Galois 表現

$$\rho_{\mathcal{F}_i} : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(\mathcal{O}_L)$$

が存在する.

Definition 3.1 における $S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}$ の基底と同じ添え字 i, j を走らせて $\rho_{\mathcal{F}_i}$ たちの直積

$$\rho' := \prod_{i,j} \rho_{\mathcal{F}_i} : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2\left(\prod_{i,j} L\right)$$

をとり, その表現空間を

$$W := \left(\prod_{i,j} L\right) \oplus \left(\prod_{i,j} L\right) = \prod_{i,j} (L \oplus L)$$

とおく. $\mathfrak{n}l$ と互いに素なすべての整 ideal \mathfrak{m} に付随する Hecke 作用素 $T(\mathfrak{m})$, $S(\mathfrak{m})$ たちが \mathcal{O}_L 上生成される $\text{End}(S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}})$ の \mathcal{O}_L -subalgebra を T とおく (T には, $\text{End}(S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}) \cong M_d(L)$ (ここで, d はしかるべき自然数) を通して p -進位相を入れておく). 基底 $\{\mathcal{F}_i(\mathfrak{a}_{ij})\}_{i,j}$ の各元が T に属する任意の Hecke 作用素に対して固有ベクトルであることに注意して, 1 次結合の係数を対応させる L -線形同型

$$S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}} = \bigoplus_{i,j} L\mathcal{F}_i(\mathfrak{a}_{ij}z) \cong \prod_{i,j} L$$

と T の $S_L^0(\mathfrak{npl}, \chi)^{l\text{-new}}$ への作用を通して, $\prod_{i,j} L$ を T -加群とみなす. 各成分が 1 である元 $x = (1)_{i,j} \in \prod_{i,j} L$ を用いて

$$\varphi : T \rightarrow Tx; \quad t \mapsto tx$$

とおけば, φ は連続な T -algebra の同型写像であり, 上で定義した W への $\text{Gal}(\bar{F}/F)$ -作用 ρ' について, \mathfrak{npl} と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal

\mathfrak{q} に対し,

$$\begin{aligned}\mathrm{Trace}(\rho'(\mathrm{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= (c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}_i))_{i,j} = \varphi(T(\mathfrak{q})), \\ \det(\rho'(\mathrm{Frob}_{\mathfrak{q}})) &= (\chi(\mathfrak{q})N\mathfrak{q})_{i,j} = \varphi(S(\mathfrak{q})N\mathfrak{q})\end{aligned}$$

となる.

したがって, φ を通して擬表現の観点からみたとき, ρ' はあたかも T に付随した Galois 表現であるかのような振る舞いをしている. Theorem 1.1 を証明するという本来の目的のためには, l に関して new である level npl の Hecke 環 T に属する Hecke 作用素たちと, level np の Λ -adic newform \mathcal{F} の Hecke 固有値を結びつける議論が必要となる. その際, 次で定義される \mathcal{F} に付随する “congruence module” $C_L(l)$ が重要な役割を果たす:

Definition 3.2 ([18, Section 1.6]). \mathcal{O}_L -加群

$$\begin{aligned}H_L(l) := \{ \mathcal{H} \in \mathcal{S}_L^0(npl, \chi)^{l\text{-new}} \mid \mathcal{G} := \mathcal{H} + u\mathcal{F} + v\mathcal{F}(lz) \in \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(npl, \chi) \\ \text{with some } u, v \in L \}\end{aligned}$$

を用いて, \mathcal{F} に付随する congruence module を

$$C_L(l) := H_L(l) / (\mathcal{S}_L^0(npl, \chi)^{l\text{-new}} \cap \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(npl, \chi))$$

と定義する.

$C_L(l)$ には, その定義により T -加群の構造が入り, T の ideal I を

$$I := \mathrm{Ann}(C_L(l)) (= \{t \in T \mid tx = 0, \forall x \in C_L(l)\})$$

とおく. 任意の $\mathcal{H} \in H_L(l)$ を $\mathcal{G} \in \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(npl, \chi)$ と $u, v \in L$ を用いて $\mathcal{H} = \mathcal{G} - u\mathcal{F} - v\mathcal{F}(lz)$ と表しておけば, nl と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の整 ideal \mathfrak{m} に対して,

$$\begin{aligned}(T(\mathfrak{m}) - c(\mathfrak{m}, \mathcal{F}))\mathcal{H} &= (T(\mathfrak{m}) - c(\mathfrak{m}, \mathcal{F}))\mathcal{G} \\ &\in \mathcal{S}_L^0(npl, \chi)^{l\text{-new}} \cap \mathcal{S}_{\mathcal{O}_L}^0(npl, \chi)\end{aligned}$$

となるので, $T(\mathfrak{m}) - c(\mathfrak{m}, \mathcal{F}) \in I$ である. よって, \mathcal{O}_L -algebra としての構造射 $\mathcal{O}_L \rightarrow T/I$ は全射となり, その kernel を \mathfrak{b}_l とおけば, \mathcal{O}_L -algebras の同型

$$\psi : T/I \xrightarrow{\sim} \mathcal{O}_L/\mathfrak{b}_l; \quad T(\mathfrak{m}) \mapsto c(\mathfrak{m}, \mathcal{F}), \quad S(\mathfrak{m}) \mapsto \chi(\mathfrak{m})$$

が誘導される. これで, l に関して new である Hecke 作用素から \mathcal{F} の Hecke 固有値への橋渡しがなされたことになる. ここで, 橋渡しの行先が \mathcal{O}_L 自身ではなく, 剰余環 $\mathcal{O}_L/\mathfrak{b}_l$ とならざるを得ないことに注意. この同型を手掛かりに, Galois 表現 $\rho_{\mathcal{F}}$ の構成に向けて議論を進めよう.

[18, pp.567-570] において, congruence module に関する重要な定理 [18, Theorem 1.6.1] を用いて, 次の事実が証明されている (Wiles は [18, p.567] で, これを証明することが “crucial difficulty” と述べている):

Claim. \mathfrak{np} と互いに素な \mathcal{O}_F の無限個の素 ideals l とそれらに付随して \mathfrak{b}_l を含む高さ 1 の \mathcal{O}_L の素 ideals Q_l で次の二つの条件を満たすものが存在する:

- (i) l で添え字付けられた $P_l := Q_l \cap \Lambda_{\mathcal{F}}$ たちは, $\Lambda_{\mathcal{F}}$ の互いに相異なる高さ 1 の素 ideals である;
- (ii) \mathfrak{np} の素因子とこの Claim に現れるすべての l たちからなる \mathcal{O}_F の素 ideals の集合 Σ の analytic density は 0 である.

以下, この Claim にある \mathcal{O}_F の素 ideal l と \mathcal{O}_L の素 ideal $Q_l (\supset \mathfrak{b}_l)$ を用いる. また, 擬表現を用いる議論を簡単にするために $p \neq 2$ としておく ($p = 2$ の場合でも同様に議論できる).

$\rho' = \prod_{i,j} \rho_{\mathcal{F}_i}$ を構成する際に, 各 $\rho_{\mathcal{F}_i}$ で複素共役 $c \in \text{Gal}(\bar{F}/F)$ に対する表現行列が $\begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$ となるようにあらかじめ表現空間の基底を調整しておいて, Lemma 2.1 の証明と同じように, ρ' から $\mathfrak{np}l$ の外不分岐な $\prod_{i,j} L$ への擬表現 $\tilde{\rho}'$ を構成すれば, $\mathfrak{np}l$ と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\begin{aligned} \text{Trace } \tilde{\rho}'(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= \varphi(T(\mathfrak{q})), \\ \det \tilde{\rho}'(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= \varphi(S(\mathfrak{q})N\mathfrak{q}) \end{aligned}$$

となるので, $\tilde{\rho}'$ は Tx に値をもつ. よって, $\tilde{\rho}'$ と φ^{-1} を合成することで, $\mathfrak{np}l$ の外不分岐な T への連続な擬表現 α_l で, $\mathfrak{np}l$ と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\begin{aligned} \text{Trace } \alpha_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= T(\mathfrak{q}), \\ \det \alpha_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= S(\mathfrak{q})N\mathfrak{q} \end{aligned}$$

となるものが得られる. α_l の値を $\text{mod } I$ してから ψ で $\mathcal{O}_L/\mathfrak{b}_l$ につなぎ, さらに $\text{mod } Q_l$ することで得られる \mathcal{O}_L/Q_l への擬表現 $\beta_l := \psi(\alpha_l(\text{mod } I))(\text{mod } Q_l)$ は, $\mathfrak{np}l$ と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\begin{aligned} \text{Trace } \beta_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}) \pmod{Q_l}, \\ \det \beta_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= \chi(\mathfrak{q})N\mathfrak{q} \pmod{Q_l} \end{aligned}$$

となる. 各 $c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}), \chi(\mathfrak{q})N\mathfrak{q}$ は $\Lambda_{\mathcal{F}}$ の元であるので, β_l は $\mathfrak{np}l$ の外不分岐な $\Lambda_{\mathcal{F}}/P_l$ への擬表現となり, $\mathfrak{np}l$ と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\begin{aligned} \text{Trace } \beta_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}) \pmod{P_l}, \\ \det \beta_l(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}) &= \chi(\mathfrak{q})N\mathfrak{q} \pmod{P_l} \end{aligned}$$

を満たす.

Lemma 2.1 の証明における Galois 表現の構成を, Claim の素 ideals l で添え字付けられた \mathcal{O}_L/P_l への連続な擬表現 β_l たちに適用することができて, Σ の外不分岐な Galois 表現

$$\rho : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(M_{\mathcal{F}})$$

が存在し, Σ に属さない \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対して,

$$\text{Trace}(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}),$$

$$\det(\det(\text{Frob}_{\mathfrak{q}})) = \chi(\mathfrak{q})N_{\mathfrak{q}}$$

を満たす. 一方で, n_p と互いに素な Σ に属する素 ideal l を一つ固定して, $\Sigma \setminus \{l\}$ に対して上述の構成を適用すれば, $\Sigma \setminus \{l\}$ の外不分岐な Galois 表現 $\rho_l : \text{Gal}(\bar{F}/F) \rightarrow \text{GL}_2(M_{\mathcal{F}})$ で, Σ の analytic density が 0 であることに注意して Chebotarev の稠密定理から, ρ と全く同じ trace と determinant をもつものが構成される. [17, Proposition 2.1] により, ρ と ρ_l のいずれも既約なので, これらは同値な表現となる. とくに, ρ は l で不分岐となり, この議論をくり返すことで ρ が n_p の外不分岐であることがわかる.

さらに, p を割る \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{p} に対し, $\rho' = \prod_{i,j} \rho_{\mathcal{F}_i}$ の各成分 $\rho_{\mathcal{F}_i}$ は \mathfrak{p} で ordinary, つまり, ある二つの characters $\varepsilon_{1,i}, \varepsilon_{2,i} : D_{\mathfrak{p}} \rightarrow L^\times$ で, とくに $\varepsilon_{2,i}$ は不分岐で $\varepsilon_{2,i}(\text{Frob}_{\mathfrak{p}}) = c(\mathfrak{p}, \mathcal{F}_i)$ となるものが存在して,

$$\rho_{\mathcal{F}_i}|_{D_{\mathfrak{q}}} \cong \begin{pmatrix} \varepsilon_{1,i} & * \\ 0 & \varepsilon_{2,i} \end{pmatrix}$$

とかけるので,

$$\rho'|_{D_{\mathfrak{q}}} \cong \begin{pmatrix} (\varepsilon_{1,i})_{i,j} & * \\ 0 & (\varepsilon_{2,i})_{i,j} \end{pmatrix}$$

となる. 一方で, Claim にある各 l に対して, 環準同型の合成

$$\left(\prod_{i,j} L \supset \right) \mathbf{T}x \xrightarrow{\phi^{-1}} \mathbf{T} \xrightarrow{\text{mod } I} \mathbf{T}/I \xrightarrow{\psi} \mathcal{O}_L/Q_l \left(\supset \Lambda_{\chi}/P_l \right)$$

のもと, ρ' の構成方法から, n_{pl} と互いに素な \mathcal{O}_F の任意の素 ideal \mathfrak{q} に対し,

$$\psi((\varphi^{-1}(\text{Trace}(\rho'(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}))))(\text{mod } I)) = \text{Trace}(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}))(\text{mod } P_l),$$

$$\psi((\varphi^{-1}(\det(\rho'(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}))))(\text{mod } I)) = \det(\rho(\text{Frob}_{\mathfrak{q}}))(\text{mod } P_l)$$

が成り立つので, Chebotarev の稠密定理により,

$$\psi((\varphi^{-1}(\text{Trace}(\rho')))(\text{mod } I)) = \text{Trace}(\rho)(\text{mod } P_l),$$

$$\psi((\varphi^{-1}(\det(\rho')))(\text{mod } I)) = \det(\rho)(\text{mod } P_l)$$

を得る. よって, 無限個の l で $\rho(\text{mod } P_l)|_{D_{\mathfrak{p}}}$ の trace と determinant は, 部分表現 $(\varepsilon_{1,i})_{i,j}$ とそれによる商表現 $(\varepsilon_{2,i})_{i,j}$ をもつ $\rho'|_{D_{\mathfrak{p}}}$ の trace と

determinant から環準同型の合成によって誘導されるので, $\rho(\text{mod } P_l)|_{D_p}$ はそれらに対応する部分表現 $\varepsilon_{1,l}$ と商表現 $\varepsilon_{2,l}$ をもつ. とくに, $\varepsilon_{2,l}$ は不分岐で, $\varepsilon_{2,l}(\text{Frob}_p) = c(p, \mathcal{F})(\text{mod } P_l)$ を満たす. このとき, Proposition 2.3 の証明の (2) で用いた議論を, $\{\rho(\text{mod } P_l)|_{D_p}\}_l$ に適用することができて, ρ が p で ordinary であることが示される.

以上のことから, ρ は求める $\rho_{\mathcal{F}}$ の役割を果たすので, Theorem 1.1 は証明された.

4. Appendix

本節では付録として, 本講演を準備するにあたり大きく参考にした文献 [19] において, 誤字あるいは脱字などが見受けられる箇所についてまとめておく. [19] を参照する際に, ご参考いただければ幸いと存ずる.

以下, p はページ数, l は行数を表す. ページ数は「 $R = T$ の最近の発展 佐藤・Tate 予想と Serre 予想」報告集 (第 1 巻) における全体ページ数を用いることにする. 矢印 “ \rightarrow ” の前後には, 前者は訂正前, 後者には訂正後の様子が記述されている.

- p. 239, l. 21, p と素 $\rightarrow p$ と互いに素
- p. 239, l. 35, すべて素 \rightarrow すべての素
- p. 241, l. 2, 満たすにより \rightarrow 満たすものにより
- p. 244, l. 15, Theorem 1.6.1 \rightarrow [27, Theorem 1.6.1]
- p. 256, l. 24, $\lim_{\leftarrow r \rightarrow \infty} \rightarrow \lim_{\leftarrow r}$
- p. 257, l. 1, 非負整数 \rightarrow 整数
- p. 263, l. 25, ideal について \rightarrow ideal n について
- p. 265, l. 10-21, $n \rightarrow \bar{n}$
- p. 265, l. 25, $p^r \rightarrow p^{r+1}$
- p. 265, l. 36, $p^r \rightarrow p^{r+1}$
- p. 266, l. 10, $p^r \rightarrow p^{r+1}$
- p. 266, l. 14, $p^r \rightarrow p^{r+1}$
- p. 266, l. 19, $(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi))/Y(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)) \rightarrow (\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)/Y(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)))$
- p. 266, l. 21, $(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi))/Y(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)) \rightarrow (\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)/Y(\mathcal{M}_{\Lambda_r}^0(\bar{n}, \chi)))$
- p. 267, l. 1, Lemma 7.2.1 \rightarrow Lemma 7.3.1
- p. 270, l. 6-7, 行替えを整理するべき
- p. 271, l. 15, 仮定できる \rightarrow 仮定した
- p. 274, l. 12, $\tilde{P}_{\nu_{k'}} \rightarrow \tilde{P}_{\nu_{k'}, 1}$
- p. 276, l. 20, $\bar{n}fl \rightarrow \bar{n}l$
- p. 277, l. 7, $p^r \rightarrow p^{r+1}$
- p. 281, l. 10, $\Lambda \rightarrow \Lambda_{\mathcal{F}}$
- p. 281, l. 14, $H_{\mathcal{H}}(l) \rightarrow H_{\mathcal{F}}(l)$
- p. 285, l. 4, Proposition 1.6.1 \rightarrow Proposition 1.16
- p. 293, l. 22, $\chi \rightarrow \mathcal{X}$

- p. 298, l. 18, $d_\sigma a_\tau \rightarrow d_\sigma d_\tau$
- p. 300, l. 16, $x_{\sigma_0, \tau} \rightarrow x_{\sigma_0, \tau_0}$
- p. 301, l. 12, $\chi \rightarrow \mathcal{X}$
- p. 301, l. 17-20, 行替えを整理するべき
- p. 302, l. 3, $\mathfrak{q} \rightarrow \mathfrak{p}$
- p. 303, l. 14, \mathfrak{m}_i の newform $\rightarrow \bar{\mathfrak{m}}_i$ の \mathcal{O}_L -係数の Λ -adic newform
- p. 303, l. 16, 有限個の除くすべての $(k, \zeta) \in \mathfrak{X} \rightarrow$ 任意の $(k, \zeta) \in A_{\mathcal{F}_i}$
- p. 304, l. 16, $C_L(\mathcal{F}) \rightarrow C_L(l)$
- p. 305, l. 2, $\mathcal{O}_L \rightarrow \mathbf{T}_{\mathfrak{p}}$
- p. 305, l. 4, $c(\mathfrak{q}, \mathcal{F}) \rightarrow T(\mathfrak{q})$
- p. 305, l. 5, $\mathcal{X}(\mathfrak{q}) \rightarrow S(\mathfrak{q})$
- p. 305, l. 20, $\mathfrak{n} \rightarrow \bar{\mathfrak{n}}$
- p. 305, l. 33, congruence \rightarrow congruence
- p. 308, l. 5, $\text{div}(M_{\mathcal{F}}) \rightarrow \text{div}_{F_{\Lambda_{\mathcal{F}}}}(N_{M_{\mathcal{F}}/F_{\Lambda_{\mathcal{F}}}}(w_l))$

謝辞 2012 年度 (第 20 回) 整数論サマースクール「Stark 予想」にて、講演させていただく機会を与えていただき、主催者の皆さんに対しまして、心より感謝申し上げます。

References

- [1] H. Carayol, Sur les représentations l -adiques associées aux formes modulaires de Hilbert, *Ann. Ec. Norm. Super.* (4) **19** (1986), 409-468.
- [2] P. Deligne, Formes modulaires et représentations l -adiques, *Sém. Bourbaki*, exp. 335, 1969.
- [3] D. Demazure, *Lectures on p -divisible groups*, Lecture Notes in Math. Vol. **302**, Springer-Verlag, New York, Heidelberg and Berlin, 1972.
- [4] H. Hida, On abelian varieties with complex multiplication as factors of the Jacobians of Shimura curves, *American J. of Math.* **103** (1981), 727-776.
- [5] H. Hida, Galois representations into $\text{GL}_2(\mathbb{Z}_p[[X]])$ attached to ordinary cusp forms, *Invent. Math.* **85** (1986), 545-613.
- [6] H. Hida, On p -adic Hecke algebras for GL_2 over totally real fields, *Ann. of Math.* **128** (1988), 295-384.
- [7] H. Hida, *Elementary Theory of L -functions and Eisenstein Series*, LMSST **26**, Cambridge University Press, 1993.
- [8] H. Hida, *Geometric Modular Forms and Elliptic Curves*, World Scientific, 2000.
- [9] H. Hida, *Hilbert Modular Forms and Iwasawa Theory*, Oxford Mathematical Monographs, Oxford Science Publications, 2006.
- [10] 加藤和也・黒川重信・斎藤毅, 数論 1, 岩波書店, 1996.
- [11] M. Ohta, On the zeta function of an abelian scheme over the Shimura curve, *Jpn. J. Math.* **9** (1983), 1-26.
- [12] M. Raynaud, Variétés abéliennes et géométrie rigide, in *Actes, Congrès Inter. Math.* Vol. **1** (1970), pp. 473-477.
- [13] J.D. Rogawski and J.B. Tunnell, On Artin L -functions associated to Hilbert modular forms of weight one, *Invent. Math.* **74** (1983), 1-42.

- [14] G. Shimura, *Introduction to the Arithmetic Theory of Automorphic Functions*, Iwanami Shoten and Princeton University Press, Tokyo-Princeton, 1971.
- [15] G. Shimura, On elliptic curves with complex multiplication as factors of the jacobians of modular function fields, *Nagoya Math. J.* **43** (1971), 199-208.
- [16] G. Shimura, The special values of the zeta functions associated with Hilbert modular forms, *Duke Math. J.* **45** (1978), 637-679.
- [17] A. Wiles, On p -adic representations for totally real fields, *Ann. of Math.* **123** (1986), 407-456.
- [18] A. Wiles, On ordinary λ -adic representations associated to modular forms, *Invent. Math.* **94** (1988), 529-573.
- [19] 山上敦士, Taylor による Hilbert cusp forms に付随する Galois 表現の構成について, in 「 $R = T$ の最近の発展 佐藤・Tate 予想と Serre 予想」報告集 第 1 巻 (斎藤毅・山下剛・安田正大 編) pp. 183-236.
- [20] 山上敦士, Wiles による Hilbert cusp forms に付随する Galois 表現の構成について, in 「 $R = T$ の最近の発展 佐藤・Tate 予想と Serre 予想」報告集 第 1 巻 (斎藤毅・山下剛・安田正大 編) pp. 237-315.

DEPARTMENT OF MATHEMATICS, KYOTO SANGYO UNIVERSITY, KYOTO, 603-8555, JAPAN

E-mail address: ayama30@cc.kyoto-su.ac.jp